ネパール人のカースト序列認識の客観性と恣意性 ——ポカラ市住民のアンケート調査による考察——

Objectivity and Subjectivity Shown in Nepalese Cognition of their
Caste Hierarchy: Questionnaire Survey of Pokhara Dwellers, Nepal

山本 勇次*

村中 亮夫**

要 旨

ネパールのグルカ王朝は1854年にネパール最初の成文法「ムルキ・アイン（民法典）」を制定した。この法典は、グルカ王朝が存立する多民族集団社会にカースト制度を導入することで王国の強固な社会的基盤を構築することが目的であった。それ以来、カースト制度はネパールに根付いて、現在では法的にカースト制度は廃止されてはいるが、社会的制度としては今もなお存続している。

そこで筆者は、1989年にポカラの現地学生数人を調査助手として採用して、ポカラ市住民の5大主要カースト、バフン、チェトリ、グルン、ネワールさらにナチュネ（アンタッチャブル）の総計368人を対象に、彼らのカースト・ランキング認識の実態調査を実行した。この調査によれば、いずれのカーストもバフン（最上位）>チェトリ>マトワリ>ナチュネという階級序列の認識においては相違がなかった。これは、古代インドのベーダ時代に形成された「バルナ制度（四姓制度）」の伝統が今もネパール人の中に存続し

* 大阪国際大学名誉教授

** 北海学園大学人文学部准教授

ているからだと思われる。しかしながら、「マトワリ（飲酒カースト群）」に属するカーストの序列に関しては、それぞれのカースト毎にかなりの食い違いが見られた。「マトワリ」とは、ヒマラヤに古くから定住していたチベット・ビルマ語族系諸語を持つモンゴロイド人種系民族集団であるが、彼らはインド・アーリア人種系のバフン・チェトリを主勢力として構成されたグルカ王朝に強制的に従属されて現在に至っている民族集団群なのである。マトワリには、マガール、グルン、ボテ、タカリー、タマン、ライ、リンブ等の10以上の民族集団群が組み入れられており、これらマトワリ内部でのカースト序列認識は、カースト毎に相当な相違が見られたのである。つまり、ネパール人のカースト全体の階級認識にはほぼ客観的な一致が見られるのであるが、ことマトワリ内部のカースト序列に関しては、カースト毎に違った主観的認識が表れていると言えよう。

Abstract

Gurkha Dynasty in Nepal proclaimed the first Nepalese statute, Muluki Ain, in 1854. This law aimed to set up a Nepalese caste system to establish a solid social foundation by uniting multi-ethnic people within the kingdom. Thereafter the Nepalese caste system has been enrooted among the kingdom, and it has been still remaining as a social custom of Nepal although it has been legally abolished in contemporary Nepal.

The present author of this paper adopted several Nepalese university students as local research assistants and let them interview totally 368 dwellers in Pokhara, Nepal, in the summer of 1989. Those interviewed consist of 5 major castes, Bahun (Brahman), Chhetri, Gurung, Newar, and Nachhune (Untouchables).

Our research finds that all these major castes agree on the hierarchical ranking of Pokhara caste system, that is, Bahun > Chhetri > Matwali (Gurung)

> Nachhune.

This coincidence may be proved that the contemporary Nepalese have been still influenced strongly with the ancient Indian model of “Varna system” (Brahmana > Kshatrya > Vaisha > Sudra). However, concerning to internal caste ranking within Matwali, their hierarchical cognition differ considerably. “Matwali” consists of more than ten Mongolian ethnic groups of respectively different Tibet-Burman languages such as Magar, Gurung, Bhote, Takhali, Tamang, Rai, Limbu and so on. When Brahmans and Chhetris established Gurkha dynasty, those Mongolian ethnic groups were forcefully situated within the present caste hierarchy. As for the ranking of major caste groups, Nepalese people shows an objective coincidence, but, concerning the caste ranking within Matwali groups, they present considerable subjective differences.

キーワード：ネパール、ポカラ、カースト序列、ムルキ・アイン、マトワリ、カースト・ランキング、客観的認識、主観的認識

Key words : Nepal, Pokhara, caste hierarchy, Muluki Ain, Matwali, caste ranking, objective cognition, subjective cognition

1. 本稿の問題意識と目的

山本勇次は、東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所の「助手現地投入」で1980年に初めてネパールに調査出張して以来、ネパール中西部の観光都市ポカラでフィールドワークを繰り返し続けてきた。その間に、ポカラの全戸調査を初めとして、ポカラのカースト制度の実態調査ならびにカースト通婚の変容などを研究してきた。このような筆者の長い期間のネパール滞在を通じて、絶えずポカラの現在あるカースト制度が、ネパールのグルカ王朝成立期に発布されたネパール最初の成文法「ムルキ・アイン (Muluki Ain) : 民法典」によって導入されたカースト制度の残滓であること、さらに

職能的な実態とはかかわりのない社会的儀礼関係であり、だからこそ相互の階級的序列にはうるさい社会的関係であることを実感してきた。そして、現在のポカラのカースト制度に見られる序列構造を現地のネパール人がどのように認識しているのか、かつその認識がどの程度に客観的妥当性を持っているのかという実態を、ある程度数量的なデータで把握しておきたいと思うようになった。そこで、トリブバン大学ポカラ・キャンパスのネパール人学生諸君 24 名をリサーチ助手として採用したポカラ市全域の住民にアンケート調査を試みた(山本・北村 1989; 1990; 1991; 1994)。この一連のポカラ全域調査に参加してくれたネパール人学生二人を継続して使用し、1989年夏に、ポカラ在住ネパール人のカースト序列認識に関するアンケート調査を実施した。調査対象は 400 人を目標にしていたが、実際は 368 人にしかすぎない。残念ながら、このアンケート調査の終了後、筆者は本務校の役職業務に忙殺されることになり、自分の研究時間が取れなくなってしまったことから、調査結果のデータは以後十年以上もの間、手つかずのまま放置することになった。それが、このたび、北海学園大学文学部の村中亮夫氏によって統計処理をしてもらうことができたので、ここにやっと本稿をまとめることが出来るようになったのである。勿論、このデータ収集時 1998 年のネパール王国は、マオイストが跋扈する政治的不安定さはあったが、その後、マオイスト勢力はネパール全土を席捲して、今や王制は倒れ、ネパール共和国へと大きく様変わりしている。しかしながら、流行を敏感に反映する服装や風俗とは違って、ネパール人の伝統的なカースト意識という主要価値体系は、最近のネパールの政治変動にも関わらず 100 年以上もの歴史に蓄積された固定した社会意識なのである。したがって、筆者の調査時と現在とで、カースト意識は余り変化が起こっていないと想定されるので、本稿での論考は、現在のネパールでも妥当するものと思われる。

2. アンケート調査の実施

アンケート調査の実施は、1998年夏にポカラ在住の住民、総計368人に対して実施された。彼らのカースト別の人数は、下の表1のようになる。

表1 カースト別アンケート調査協力者

カースト名	協力者
バフン	82人
チェトリ	83人
グルン	80人
ネワール	55人
ナチュネ	68人
総計	368人

3. アンケート調査の検証課題

3-1. ヴァルナ仮説

古代インドのベーダ文明が確立した頃、現代のカースト制度の母胎となった「ヴァルナ制度」が成立したと言われている。そもそも「ヴァルナ (varna)」とはサンスクリット語で「(肌の)色」を意味しており、原初のヴァルナ制度は、白い肌をもった「アーリア人」がインド大陸に侵入し、パンジャブ上流地域に定住して黒い肌をもったインド原住民を征服した上で構築された社会体制の中で、肌の色で持って征服者と被征服者とを区別したところに成立したものと考えられる。やがて、アーリア人がインド大陸全域に進出し、同時に原住民と混血する中で、肌の色の相違で混血度を識別する上で、「バラモン」、「クシャトリヤ」、「バイシャ」、「シュードラ」のヴァルナ制度（中国の古代文献では「四姓制度」と訳されている）が確立したのであった。

この四姓制度は、現在のネパールでもカースト群の間の四階級のランキング制度があり、ネパールの人々は、「バフン」が最上級で、次に「チェトリ」

が来て、その次に「マトワリ」が来て、最下層にアンタチャブルの「ナチュエネ」が来るという四階層制と対応するものであるかどうかは、小生の久しい疑問であった。そして、このバワン、チェトリ、マトワリ、ナチュエネの四階層をネパール人の全てが等しく認めているかどうかを、本アンケート調査で検討することが最初の課題となる。

3-2. 具体的なカースト階梯認識

「マトワリ (Matwali)」とは、ヒマラヤ丘陵地に古くから住んでいたモンゴロイド系諸原住民族で、彼らは耐寒上の必要性から日常的な飲酒慣行を保有していた。したがって、北インドからネパールに北上してきたバワン・チェトリの人々は、飲酒慣行を有するヒマラヤ原住民を「マトワリ (alcohol-taking tribes)」と総称するようになる。また「ナチュエネ (Nachhune)」の用語は、「不可触民 (Untouchable)」に属するカースト群総称である。これら「マトワリ」や「ナチュエネ」の名称は、1854年制定されグルカ王朝のカースト制度導入の基盤となったネパール最初の成文法『ムルキ・アイン』で採用されている。筆者の調査では、ポカラに居住する「マトワリ」には「グルン」、「マガール」、「ネワール」などの主要カースト群がおり、また「ナチュエネ」には「ダマイ」、「カミ」、「ミヤ」などがある。そこで、これらの個々のカーストの人々にアンケート調査をして、応対的なカースト序列をどのように認識しているか、それから、ポカラに頻繁に来る日本人「ジャパニ」の彼らのカースト階梯上の位置づけを尋ねてみたのである。

4. インド亜大陸の異民族支配とカースト制度の起源

英語の「カースト (caste)」という言葉は、本来「血の純潔」を意味していたポルトガル語の「カスタ (casta: 種族、血統、人種)」から派生したという (湯田 1997:94)。このカーストを指す本来のサンスクリット語は「ヴァ

ルナ（四姓）」である。このカースト制度の成立の底流には、北インドに侵入してきた少数のアーリア系の支配者が多数の被征服民であった先住民であるドラヴィダ系諸部族を軍事的に征服するだけでなく、イデオロギー的にも支配した点があることを見逃してはなるまい。ハインリッヒ・ツィンマーによれば、カースト制度誕生の当初は「アーリアン」と「シュードラ」との二階級しかなかった（湯田 1997:95）と言う。それが後に、ヴェーダ文明（その中にはバラモン教も含まれている）の成熟とともに、バラモン主導による宗教的意味（浄・不浄の儀礼的価値付け）による理論的武装を整え、宗教的日常生活としてより精緻、より複雑に構造化されていったのである。その結果、アーリアンの階級が多層化されて「バラモン（ブラーマン）」、「クシャトリア」、「バイシャ」、「シュードラ」の四階級からなる「ヴァルナ・モデル」¹⁾が出来上がったのである。このヴァルナ・モデルが出来上がった頃、バラモン、クシャトリア、バイシャは「色の白い（明るい）」アーリアン系の征服民であり、最下位のシュードラのみが「色の黒い（暗い）」ドラヴィダ系の被征服民だったのである（湯田 1997:76）。

バラモン教がジャイナ教や原始仏教の批判に絶え、より土着的要素を取り入れて再生したのがヒンドゥー教である。この再生によりヒンドゥー教はインド大陸の人々に間に定着したのであるが、ヒンドゥー教と表裏一体の関係にあるカースト制度もインド大陸中に拡大することになったのである。この両者の密接な結合については、ルイ・ドュモン（Dumon 1980）が主張する様に、「浄／不浄の二元的価値意識」がイデオロギー的に大きく貢献している。しかも、この浄／不浄のイデオロギー的価値観がカースト制度の階級原理として組み入れられ、しかも出生時に所与のものとして定められる浄／不浄の価値量が「輪廻転生の思想」と結び合ったところに、カースト制度の永続化の秘密があったと思われる。かくして、カースト制度は少なくとも国家を統合する立場の人々にとっては都合のよい「支配者のイデオロギー」と成り得たのである。今日でもインドやネパールで余り教育を受けていない人々の

間では、ある人が特定のカーストに生まれ落ちるのは、その前世の因縁であり、そのカーストの規定を順守することによって、来世はより優れたカーストに再生しようと固く信じる者が少なくない。また、その地域で伝統的に「カースト内婚」が原則で「カースト外婚」が蔑視されてきた事実も、上位カーストが下位カーストにより、その浄性を汚染されることを忌み嫌うからである。

このカースト制度は、インドでは二千年余の歴史を掛け、自給自足的な農村的土壌の中で自生的に発展してきた。その悠久の歴史の中で時間的に熟成され、いつしかインド大陸全域に浸透したのである。ところが、ネパールでは、カースト制度が国家権力によって恣意的に導入され、その社会統合の要として使用されたのである（シャルマ 1978）。この事実は、インドとネパールのカースト制度の歴史の基本的な相異でもある。

シャルマ（1977:291）によれば、インド北部平原にいたヒンドゥー教徒たちが北上して初めてヒマラヤに移住してきたのは紀元1世紀に始まり、また同じく平原ヒンドゥー教徒の大規模なヒマラヤ移住の第二波は、イスラム教徒のインド大陸侵入の余波を受けた12世紀から始まり14世紀始めまで続いたという。この第二波のヒンドゥー教徒のヒマラヤ移住者は主に西ネパールのジューラ地方を中心に定着し、その中から「グルカ（またはゴルカ）」王国が勃興して来る。従って、このグルカ王朝の支配者たちがインド平原で既に明瞭な社会的習慣となっていたカースト制度というものを十分に熟知していたはずである。

5. ラナ専制政治の始まりとカースト制度の導入

ネパールに最初の「カースト制度」²⁾が導入されたのは、13世紀から18世紀までカトマンドゥ盆地で栄えた「マッラ王朝」の最盛期であった。このカースト制度の残滓は、現在でもカトマンドゥ盆地内のネパール村落に残さ

れている（石井 1980）。その後、マッラ王朝は三つの王国に分裂し、三都王国時代が続いた。そして、これらマッラ三王国は、ジウムラ地方に台頭しネパール中西部へと拡大し、更にカトマンドゥ盆地へと東進してきたプレティビ・ナラヤン・シャハ大王率いるグルカ王朝軍によって次々に攻略され、ついに 1769 年、最後のバドガオンが陥落されてしまうのである。グルカ王朝は、大王の孫にあたるラナ・バハドール・シャハ王により更に東方に武力平定を続け、1792 年に現在のネパール王国領とほぼ同じ領土を確保するに至ったのである。

グルカ王朝は全国武力平定を終えると、宮廷内部で王位継承を巡る内紛を始め出す。しかし、1805 年には宮廷内紛を收拾した宰相ビンセン・タパが、グルカ王朝の更なる領土拡大をめざして南進政策を実行した。その結果、当時インドを植民地にしていた東インド会社（イギリス植民地政府）の軍隊とタライ地方（現在のインド・ネパール国境からネパール内に東西に広がる低地帯）の領有を巡って衝突し、「グルカ戦争（英ネ戦争）」（1814-16 年）に至ったのである。グルカ王朝の兵士たち（後に世界的に「グルカ兵」と呼ばれる）は果敢に闘ったが、英国植民地軍の重火器の前に破れざるをえなかった³⁾。

このグルカ戦争の敗北をきっかけに再燃した宮廷内紛を、1846 年の宮廷クーデターによって制圧したのはジャン・バハドール・ラナ将軍であった。この J.B. ラナ将軍は、当時のネパール国王を幽閉し、自らが国王に代わって将軍政治を始めたのである（Thapa 1981:8）。この時以来ラナ家は、ネパールをやく 100 年間専制的に支配することになる。宮廷の実権を掌握したジャン・バハドール・ラナ将軍は、1850 年にイギリスを訪問し、当時の世界最強の近代国家イギリスを視察し、イギリス政界の指導者達と親交を結ぶことに務めたと言う。彼のイギリス視察による見聞は、その当時世界第一の近代国家イギリスと誕生間もないネパール王国との間の大きな落差を痛感させたことであつたらう。そして、そのイギリス植民地勢力が自国の国境まで迫ってい

る現実に危機感を抱いたに違いない。従って、イギリス視察から帰国した直後の J.B. ラナ宰相が側近達に法典の作成準備を命じたのは、視察によって生まれた彼の危機感と無縁であるはずがなかろう。かくして彼は、1854 年、ネパール最初の成文法である「ムルキ・アイン」を発布したのであった。

ムルキ・アイン発布時の 1854 年から 1857 年までネパールとチベットの国境戦争が起こっているが、この戦争で J.B. ラナはネパール中東部のタマン族がチベットから受けている影響力を武力で一掃させた(Tamang 1992:26)。また 1857 年にインドでセポイの反乱が勃発すると、彼は率先してグルカ兵をインドに派兵して、反英独立の弾圧に力を貸したのであった。結果的には、イギリスはこの反乱を平定し、率先して軍事的助力をしてくれた J.B. ラナに報いるために、英ネ戦争で割譲したタライ地方の一部をネパールに返還したくらいであった。この様にイギリス視察後の J.B. ラナ宰相は、(1) 国家形成の為の法典を作成・発布し、(2) 弱い隣国(チベット)の領土的干渉を武力により撤廃させ、(3) 強い隣国(イギリス植民地政府)には積極的に恩を売るなどの大活躍をしたが、これらは全て誕生間もないネパール王国の領土保全と独立確保の為の布石であったと見る事が出来よう。つまり、J.B. ラナは、一方ではイギリスに対して朝貢的な外交政策をとりながら、他方ではネパールが独立国家たるに相応しい国家形成を急いだのである。彼はネパール王国の国家形成を急ぐために、その当時の近代国家に必要な国民統合を促進する法律制定の必要性を直感し、イギリス視察後から八年後にネパール最初の成文法ムルキ・アインを発布したのであった⁴⁾。

6. ムルキ・アインとグルカ型カースト制度

コックス(Cox 1989:12)は、「ムルキ・アインは、厳格な階層的カースト制度の維持をヒンドゥー王国の主要な義務であると規定した『マヌスミリティ(Manusmriti):マヌ法典』の後期短縮版に基礎つけられる『シャストラ

(Shastras) : ヒンデュー政体における社会的政治的組織の諸原理』という考え方に基づいている」と言う。つまり、シャストラこそはムルキ・アインが存立する理念的基礎であり、これ以降のネパール王国が国政の基本的思想として現在に至るものとなったのである。私見によれば、1990年の新憲法さえもが、このシャストラの理念は制限されたとは言え、放棄されたとは言えない。このムルキ・アインの制定には、少なくとも二つの明瞭な政治的配慮が込められていた。第一の政治的配慮は、急速な武力制覇で1792年にネパール全土を政治統一したものの、それから60余年が経ち、グルカ王朝の急速な領土膨張政策により拡大した行政機構が混乱しだしていた。シャルマ(1977:278)によれば、その頃ネパール中で行政官による法解釈の矛盾や混乱が起こっており、ネパール全国を統治する法的基盤の確立が希求されたのである。

第二の政治的配慮は、グルカ王朝のネパール平定により、その国家は今や極めて異なる三種類の民族集団、つまりバフン、チェトリ等のアーリアン系ヒンドゥー教徒たちと、チベット・ビルマ系モンゴロイド諸集団、それにカトマンドゥ盆地の被征服民ネワール族とを一つの国家体制のなかに統合する必要があったのである。それでムルキ・アインにより、グルカ王朝の権力基盤であったバフン・チェトリ並びにそれとは異なる他の全て（「不可触民(ナチュネ)」をも含めた)の「ジャート(jat)」⁵⁾を一元的な身分秩序体系の中に統合しようとしたのである。内堀基光(1989)の言葉を借りれば、「国家」が本来カースト制度とは何の関係もなかったモンゴロイド系マトワリ諸族のそれぞれに「名づけ」をして、その垂直的な階梯構造の中に組み入れてしまったのである。

ネパールの雑多な諸民族集団の間に儀礼的階級秩序による国民統合を志向したムルキ・アインは、その当時の宰相J.B. ラナー人の独創と独断とで作成されたのではない。ムルキ・アインの初版本の巻末には添付リストが載っており、その法令の編纂協力者として「宮廷評議会(bhadari kausal)」⁶⁾の

構成員達が署名を残している。種々のジャートの代表者をその宮廷評議会のメンバーに加えている点は、その当時の民族集団の多様性と政治的情勢とを配慮したJ.B. ラナのバランス感覚（逆に、その様な配慮が必要な程度にラナ家の政治的基盤が弱体であったとも考えられる）が伺える様で、興味深い。とりわけ、王家シャハ代表者の数の約八倍に近い多数のラナ家代表者達、全構成員の過半数に近い最大多数のチェトリ代表者達が居座る一方で、武力征服されたネワール族の代表者を始め、グルン、マガール、タマン等のモンゴロイド系諸民族集団の代表者、さらにその他の少数民族集団の代表までもが構成員に加えられていることは特筆されるべきであろう。

ムルキ・アインによれば、全ジャート群は五つの儀礼的階級序列で階層化されている。また、各々の序列群に属する夫々のジャート群も更に副次的に序列化されている（Hofer 1979:45）。まず第一儀礼的階級に「タガダリ（Tagadhari：再生族）」と呼ばれるジャート群がいる。タガダリとは、清浄カーストを象徴する「ジャンイ（聖紐）」⁷⁾を身につける事を許される人々である。ムルキ・アインの規定によれば、タガダリには、「ブラーマン」、「ラージプート（タクリ・チェトリ）」⁸⁾、「チェトリ（クシャトリアのネパール語訛り）」、「ネワール・カーストの上位カーストの人々」等が含まれている。従って、ムルキ・アインでもグルカ王朝の中核の人々であるパルバティ・ヒンドゥー（ブラーマン、タクリ・チェトリ、チェトリ達）が、タガダリとしてカースト制度の最上位に祭り上げられたのである。さらにタガダリには、この法典によって、「それ以外のジャートには課せられた政府に対するある種の税金や強制労働の提供の義務などを免除される特権が、パフンとチェトリだけには与えられていた」（Caplan 1970:71）のである。

問題は、そのグルカ王朝が武力で次々に征服したネワール族内部の多くのカースト群をなぜ最上級の儀礼的階級内に入れたかと言う点である。これは、仇敵ネワール族を融合する政策的理由があったとしか他に考えられない。このネワール融合政策の色調は、ムルキ・アインの編集宮廷評議会の中

にネワール代表者が4人も含まれていた事実にも読み取れよう。現在でも、ポカラのバフン（ブラーマン）やチェトリ等は、自分達の祖先が武力征服したネワールの人々を揶揄する本音は明瞭であり、また逆にネワールたちの間には、それに対する反感が感じられる。恐らく、J.B. ラナの時代には両民族集団間の感情的離反と敵対意識がもっと強烈であったに違いない。そこで、迫りくる西欧植民主義勢力の潜在的脅威を重視したJ.B. ラナは、その両者間の身分的差異を法律的に階級化するよりも同等化して、その差異を曖昧化して両者の融和を図る事の方が早急な国民統合上より重要であるとの判断をしたものと思われる。（この点は、後に明瞭にするが、最高位カーストの同列化のみならず、旧ネワール式カースト階級と重合するように、このグルカ式カースト階級を構成している全体像からも言える事である。）さらに、古い中世から都市文明を享受してきたカトマンドゥ盆地のネワール族に対して山地出身の新興勢力であるグルカ王朝の中核勢力は、ある種の「文化的劣等感」を持っていたのかもしれない。ともあれ、ネワール族の間には工芸・商業部門等を優秀な人材が揃っており、新しい産業国家建設の為には、彼らを優遇することも必要だと判断したことは、確かな事実であったろう。

次に、第二階級に、「ナマシニヤ・マトワリ (Namasinya Matwali)」と総称される「奴隷化されない酒飲みカースト群」が置かれた。このグループには、マガール、グルン、タマン等のチベット・ビルマ語族系のモンゴル系諸民族集団が主に入れられている。「マトワリ」とは「酒を飲む人々」という意味である。もともと寒冷な高地山岳地帯に住んでいたので冬季の暖を取るために伝統的に飲酒の慣習を持っていた。それに対して、亜熱帯のインド平原出身であったバフン・チェトリらは、既に上位カーストの規範として禁酒を採択していたのであったろう。そこからバフン・チェトリの視点から、モンゴロイド系諸民族集団に共通の飲酒の習慣はある種の文化的特性として特別視されたれ、彼らの「名づけ」によってモンゴロイド系山岳諸民族集団を総称するようになったものと思われる。また、モンゴロイド系諸民族集団に続

いて、彼らに次いで「ネワール系の貴金属細工師カースト（スナール：Sunuwar）」⁹⁾など、その他のネワール族諸カースト群も第二階級の中に入れられている。

ここで注目すべきは、基本的にヒンドゥー教徒でなく、飲酒習慣を持つチベット・ビルマ語系のモンゴロイド諸民族集団が何故、もっと下層階級でなく第二階級の中に組み入れられたのかという問題である。考えられる事は、ネパール中西部から起こったグルカ王朝がかなり短い期間でネパール全土の軍事的制圧を達成したことは、チュトリ将兵のみの働きだけでは絶対に不可能であった。「マガール族」¹⁰⁾やグルン族などのマトワリ兵士をグルカ王朝が徴兵し自らの軍制に組み入れることが出来たことで、この軍事的偉業は成しえたのであった。恐らくラナ將軍政治の実力者達は、とりわけ山岳地域において豊かな軍人資質を持つマトワリ達を自分らの「旗本」として傘下に置く必要と共に、商工的才能を持つネワール族をも自分達の国家経営の「金庫番」として懐柔出来る位置に残しておく必要があると考えたに違いない。従って、カースト的身分階梯ではマトワリとネワールを自分達の一段下位に置くことで儀礼的上下関係は明瞭にしながらも「浄カースト」として、自分達と同じ食卓に付ける身分を保証したのだと考えられよう。ネワール族と他のマトワリとの身分的格差を最小限に留めたのは、この様な十分な配慮があったものと思われる。

続いて、第三の儀礼的階級には、「マシンヤ・マトワリ (Masinya Matwali)」と呼ばれた「奴隷にされる飲酒カースト群」が配置されている。それらの中には、「ボテ（チベット人）」、「クマール（壺作りカースト）」¹¹⁾、「タルー族」、「ガルティ（解放奴隷の子孫）」等が含まれている。ネパールにいる北方のチベット族、南方のタルー族のような少数民族の存在が注目される。この第三儀礼的階級までが浄カースト群であり、以下の第四、第五儀礼的階級が不浄カースト群となる。

第四儀礼的階級は、「不浄なれど水を受け取れるカースト群」であった。こ

れには、「カサイ（ネワール畜殺業者）」、「クスレ（ネワール音楽師）」、「ドビ（ネワール洗濯業者）」、「クル（ネワール皮加工業者）」、「ムレック（西欧人）」等が含まれている。ネワール系の低カースト群と共に、当時のネパール人が英ネ戦争の結果唯一接触せねばならなかったイギリス人もこの階級に入れられていることが、大層興味深い（この事実は、イギリス植民地勢力を恐れたラナ将軍たちが、イギリス人を始めてとする西欧人畏怖するばかりでなく、牛肉を食べる彼らを嫌っていたことをも意味しよう）。カースト規範では、誰から水・食物を貰え、誰から貰えないかということは、大問題である。水や食物をより不浄な者から受け取れば、受け取った人が不浄性に汚染されると信じられたからである。

最後に、最下層の第五儀礼的階級として「不浄で水を受け取れないカースト群」が来る。このボトムの階級には、「カミ（鍛冶師）」、「サルキ（皮加工師）」、「ダマイ（裁縫・音楽師）」、「ガイネ（吟遊楽師）」、「バディ（音楽師）」、「ポレ（ネワール漁師）」、「チャメ（ネワールごみ清掃夫）」等が含まれている。

以上見た五段階の儀礼的階級制度がムルキ・アインで導入された「グルカ系カースト制度」であった。これを全体的に見ると、それがマッラ王朝により最初に作られた「ネワール系カースト制度」と「意識的に」重複するように作成されている印象からどうしても免れられない。恐らく、この印象は、グルカ系カースト制度がマッラ朝のネワール系カースト制度を参考にして作られたこと、しかもグルカ朝がバファン・チェトリ（「タガダリ」）を最上級かつ中心として、その下にマトワリ諸族と仇敵「ネワール族」¹²⁾とを融合した国民形成を目指す意志があったことに由来していると思われる。

次に補記しておきたいことは、ムルキ・アインでは、異カースト間の性交渉を厳しく禁止している¹³⁾。その事は、当然、異カースト間の結婚も厳禁であることを意味する。カーストの境界を永続化する為には、それは必要な手段的処置であった。もちろん異カースト間「性交渉」と異カースト間「結婚」

とは異なる次元の事象であるが、ムルキ・アインでは「条件付き」で「カースト通婚」や「一夫多妻結婚」も認められている。第一儀礼的階級に属する男が第二・第三の儀礼的階級に属する女を娶っても構わない。しかし、その逆の場合、前者の女が後者の男と結婚することは認めていない。更に、ムルキ・アインは「一夫多妻結婚（ポリガミー）」も認めている。これは、男子系統の存続を強く希求するヒンドゥー教徒の間では、男子の乳児死亡率が女子のそれよりも極度に高い経験的事実に踏まえて必然的に起こりうるヒンドゥーの慣習の一つであったからであると思われる。

しかし、実際問題として、一夫多妻制は経済力のない男には維持できない。従って、これが実際に実行可能となるのは、第一儀礼的階級に属する権力財力ともに豊かなチェトリ（特に権力中枢に居座ったラナ氏族やタパ氏族のタクリ・チェトリ）の男たちに限定されたものと思われる。法令編纂の為の宮廷協議会の最大多数であったチェトリらが、自分たちチェトリに若干都合のよくなる方向に、ムルキ・アインにある種の「仕掛け」を作ってもなんら不思議はあるまい¹⁴⁾。ともあれ、この様な様々なカースト通婚により、チェトリ達はその人口を増やしていったのであろう。現在、少なくとも人口の点では、チェトリはネパール最大の民族集団でもある（S. Thapa 1995:186）¹⁵⁾。そして、この事は、軍事力の大きさが兵隊の総数で勘定された当時、ラナ家の長い安泰を確保する為の軍事力増強の手段でもあったと思われる。この様にして、ラナ將軍家の国家掌握はカースト制度の導入により磐石の体制を築きあげたのだと言う事が出来よう。

7. ヒンドゥー政体とパンチャヤート体制の確立

我が国の徳川幕府は、鎖国政策によって西欧列強が日本に及ぼす影響を最小限に押さえ、徳川家の支配体制の永続化を試みようとした。全く同様、ネパールでもラナ將軍家の摂政体制が採用した鎖国政策は、1951年の開国宣言

までのほぼ 100 年間、ネパールを近代文明との接触から遮断させてしまった。グルカ王朝は英ネ戦争敗戦後の 1816 年に結ばれた「セゴール条約」で、イギリス高等弁務官をカトマンズに駐在させることを無理矢理イギリスに押し付けられた。しかし、イギリス人以外の外国人には厳しい鎖国政策を採り続けたのである。この鎖国政策の間に、ムルキ・アインによって導入されたカースト制度は、ネパール津々浦々にネパールの各階層に浸透して行ったわけである。

ラナ専制政治への不満は 1936 年頃から反ラナ抵抗運動となって現れるが、1949 年にインドがついに独立を果たすと、ネパールでの反ラナ運動は一気に燃えはじめたのである¹⁶⁾。インド国民会議派は、ネパール国民会議派の誕生を助け、その反ラナ・レジスタンス運動を物心両面で支持した。1950 年、ラナ政権に監禁されていた当時のネパール国王トリブバン・ビル・ビクラム・シャハは、ネパール・インド両国民会議派の協力で、カトマンドゥでの監禁状態を抜け出し、インドに亡命する。そして、彼はインドにおいて「王政復古」を宣言し、インド政府は直ちに国王支持を表明したのであった。そこで、インドの圧力の下に、ネパール国王、ネパール国民会議派、そしてラナ將軍家の三派の間でデリー会議が開かれ、暫定政権が始められたのである。しかし、この暫定政権は成立後半年で、首相モハン・シャムシェル・ラナの辞任で終止符を打つことになった。

1954 年、トリブバン国王は、ムルキ・アインが成立したちょうど 100 年後に、ネパール王国の全権を再び王家の手に取り戻したのであった。しかし、1955 年にトリブバン国王は病氣療養の為に出かけたスイスで病死してしまったので、その翌年に、彼の息子マヘンドラ・ビル・ビクラム・シャハが王位を継承した。マヘンドラ国王は 1959 年ネパールは憲法を制定し、一旦は議会制民主主義への道を歩み始めようとしたが、ネパール国民会議派を通じてインドの影響力、そして同時に中国の影響を受けた共産主義者の台頭を恐れて、ついに 1960 年に逆クーデターを起こし、憲法を停止してしまっ

たのである。この決断は、アジアの二つの巨大国、中国とインドに挟まれた自王国の独立性を維持したいマヘンドラ国王が、ネパールに多政党議会民主主義を導入するには時期尚早と判断をした結果であった。そこでマヘンドラ国王は1961年に、一党議会制民主主義とも言われる「パンチャート制度」を導入したのである。続いて1963年、マヘンドラ国王は、古い民法典（ムルキ・アイン）を破棄し「新民法典（Naya Muluki Ain）」を發布して、これまで前者により規制されてきたカースト制度に基づく下級カーストたちに対する全ての差別を禁止するに至ったのである。確かに、この新法典は、それまでのカースト制度に基づく差別の撤廃という点でネパールの政治的近代化の嚆矢であると言えよう。しかし、この新民法典は、旧民法典が敷衍していた「ヒンドゥー政体（シャストラ）」の考え方を放棄するには至らず、カースト制度を根底から撤廃したとは言うことが出来ない。

コックス(Cox 1989:12)は新民法典を「パンチャヤート法令(the Panchayat Constitution)」と呼び、それがパンチャヤート体制と表裏一体の関係にあったことを指摘している。新民法典に残された「ヒンドゥー政体」的特徴を、コックス(Cox 1989:13)は以下のように、説明している。

パンチャヤート法令は、ネパールがヒンドゥー国家としてヒンドゥー教徒の王を持たねばならないと規定している。この法令は、伝統的なヒンドゥー的用語で、ネパール国民が四つのカテゴリー(varna)と36のジャート(jat)から組織されると規定している。また、パンチャヤート法令は家畜の屠殺と牛肉の販売と消費を禁止しているので、ヒンドゥー教の最も聖なる教えの一つを法律的に認可することになっている。最後に、ネパールの支配階級の大多数(軍隊、大臣、国会議員の中で最も権力ある地位に就いている人々ならびに王族を含む)は、ネパールの最高位のヒンドゥー・カースト(つまりブラーマン、チェトリ、タクリ・チェトリ)の人々となることは明らかである。

マヘンドラ国王が導入したパンチャヤート体制は、(1) 三権を超越する絶対王権、(2) 政党活動の禁止、(3) 国、県、郡、市町村の各レベルでの「パンチャヤート（評議機関）」を通してネパール全土の組織的統括などの特徴が見られた。そして、かの「ナヤ・ムルキ・アイン」は、このパンチャヤート体制を支える理念的法体系でもあったのである。そして、マヘンドラ国王亡き後1972年に王位を継承したビレンドラ現国王もこのパンチャヤート体制を維持したのであった。更に、ネパールの近代化と経済発展をめざす意欲に強かったビレンドラ国王は、経済発展の為の国内投資を実行する一方で、ネパール国民に「ネパール化」運動を奨励したのである。ネパール化とは、ネパールの全ての国民が様々な文化的差異を乗り越えて共通の同一の国民意識をもつことをめざすナショナル・アイデンティティを育成する為の推進運動であった。

前述した様にグルカ王朝の中核はネパール語を母語とするパルバテ・ヒンドゥー（バフンとチェトリ）であり、また、新民法法典に謳われたヒンドゥー政体の精神から必然的に行き着くのは、「ネパール化」政策の骨子が「ネパール語化」と「ヒンドゥー化」となることは当然のことであった。我々はここに、一党民主主義であるパンチャヤート体制と、ネパールのナショナル・アイデンティティを目指すネパール化政策とがネパールの「発展（ विकास）」を目的として機能的に相補関係にあることを見逃してはなるまい。

8. 現在のポカラのカースト制度と各ジャートの動き

周知の通り、1990年2月にネパールの「国民会議（コングレス）」派と「左翼（コミュニスト）」連合戦線との統一組織により本格化した民主化要求運動は、大量逮捕など政府側の弾圧に硬化した一般大衆の参加を見ることになった。それは更に、同年4月6日のカトマンドゥでの大規模デモにおいて

50人以上（政府発表では6人）の犠牲者が出たことで、国民の間にタブーとされていた国王批判さえ飛び出す危機的状況に陥ったのである。そこで急遽ビレンドラ国王は英断し、4月8日ネパール国营テレビを通じて、パンチャヤート制廃止、複数政党制の復活、憲法改正を国民に約束したのであった。それにより、この大規模デモは急速に終焉に向かった。しかし、1990年11月に発布された新憲法では、パンチャヤート体制の放棄は明瞭であるが、ネパールが「正式なヒンドゥー王国」であるという規定は残されてしまった。この国の伝統的なナショナリズムである「ヒンドゥー政体」の本質は不変だったのである。続いて、1991年5月には、パンチャヤート民主主義を放棄し多政党民主主義を謳った新憲法の下で最初の国民総選挙が実施された。その結果、 kongress 党主導によるネパール政府の成立を見た。それ以来ネパールの多政党民主主義の政治は、kongress とコミニストとが分裂し、経済階級的な横の連帯を強める方向に機能している。ポカラとその周辺でも富裕層はkongress、貧困層はコミニスト支持へと分裂を強めている。

ネパール人社会学者のサウバギヤ・シャハの言葉を借りて T. オニール (1994:57)¹⁷⁾ が指摘するように、ネパールのナショナリズムには、(1) その国家宗教としてのヒンドゥー教、(2) 公用語としてのネパール語、そして (3) タガダリが占有する王国制という三つの歴史的呪縛がある。まさしく1990年新憲法は、ヒンドゥー政体を存続させる一方で多政党民主主義を指向するという妥協の産物であった。それがため、近年のネパールは脆弱なナショナリズムが直面する上記三つの課題をめぐる政治的緊張が高まっているのである。近年のネパールでは、1990年新憲法で保障された多政党民主主義の刺激を受けて、タガダリの政治的優位の下で沈黙を続けてきたマトワリ諸族がそれぞれのジャート内結束を強める一方で、ネパール政府に向かって種々の政治的要求を表明しだす傾向が強まっている。

例えば、カトマンドゥでは、ネワール活動家がネワール語の使用はネワール族としての共通アイデンティティの確立の必須の要件であるから、学校で

もネワール族の児童にはネワール語を教えられるようにしたいという運動がある (Gellner 1986)。カトマンドゥに住むライやリンブたちの間でヒンドゥー教の最大の祝祭日である「ダサイン」に対して、ボイコット騒動が続いたことがあった。またポカラでは、グルン、マガール、ネワールなどの仏教徒たちが盛んに法要集会を開いて、ヒンドゥー教徒ではない自分達の宗教的・社会的プレゼンスを表明している。しかもグルンたちは「タヌー (TANU: グルンの家)」という自民族集団だけの政治的結社を作り出したし、マガールは自分達のジャートの連帯を全国的規模に拡大しようと努力している。これらの現象をおしなべて見てみると、現在のネパールにあるヒンドゥー政体により、つまはじきにされた非ヒンドゥー教徒たちは自らのモンゴロイド系民族集団としてのアイデンティティを強めながら、政府に対してある種の抗議運動を始めているという見方が成り立つであろう。この様な抵抗運動の背景には、パンチャヤート制度が終焉し、多政党民主主義になったとは言え、「現在の政党制度では、 kongress も コミュニストでも殆どの党選出の国会議員候補はバフンとチェトリから出ているので、それ以外の低い階級のジャートは党の中央政治の意志決定システムへの参画から閉め出されている」(O'Neill 1994:66-7)¹⁸⁾ という実感が、低迷する経済事情の悪化に強い不満を持ち出したマトワリ達の間を広まっている事実があるだろう。

このような状況の中で、ポカラにおける「ネパール」化の実態を本稿では考察してみた。ネパール政府は、多種多様なジャートの境界を無化してネパール国民が同一の強力な国民意識を保有せしめる為に「ネパール化」政策を推進してきた。しかしながら、ネパールの国家権力の中枢をバフン・チェトリが掌握する限り、このネパール化政策はサンスクリット化政策にすり換えられてしまわざるを得ない。そして、ポカラの事例では、マトワリの経済階層上層部においてサンスクリット化が確実に成功している。しかしながら、その反応の逆流現象として、貧窮化したバフン・チェトリ層では、貧困に適応する一つの戦術として脱サンスクリット化 (マトワリ化) を選ぶ者も

はつきりと出てきている。

8-1. ポカラ在住バフンのカースト序列認識

表2 バフンのカースト序列認識の調査結果

	バフン	チェトリ	マガール	グルン	ネワール	ダマイ	ミヤ	カミ
①バフン	-	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)
②チェトリ	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	-	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	80(98.8) 0(0.0) 82(100.0)
③マガール	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	-	74(91.4) 2(2.5) 81(98.8)	27(36.5) 16(21.6) 74(90.2)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)
④グルン	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	5(6.2) 2(2.5) 81(98.8)	-	4(5.1) 0(0.0) 79(96.3)	81(98.8) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)
⑤ネワール	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	31(41.9) 16(21.6) 74(90.2)	75(94.9) 0(0.0) 79(96.3)	-	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)	82(100.0) 0(0.0) 82(100.0)
⑤ダマイ	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	1(1.2) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	-	71(88.8) 0(0.0) 80(97.6)	10(12.2) 0(0.0) 82(100.0)
⑥ミヤ	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	9(11.3) 0(0.0) 80(97.6)	-	11(13.6) 1(1.2) 81(98.8)
⑦カミ	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 82(100.0)	72(87.8) 0(0.0) 82(100.0)	69(85.2) 1(1.2) 81(98.8)	-

※上段=上位回答数(率)、中段=等位回答数(率)、下段=有効回答数(率)

※回答者=82人

<バフンによるバルナ序列の認識>

- ①バフン達は「バフン>チェトリ>マトワリ>ナチュネ」という「バルナ序列」を厳正に認めている(バフン82人:100.0%)。これは『ムルキ・アイン』規定の名残であろう。

<バフンによるマトワリ内部のカースト序列の認識>

- ②「マガール>グルン」とするバフンは、74人(91.4%)である。逆に、「グルン>マガール」とするバフンは、5人(6.2%)、両者が同格とするもの

は、2人(2.5%)いた。従って、バフンの大半は、「マガール>グルン」と見ていると考えてよからう。

- ③「ネワール>マガール」とするバフンは31人(41.9%)、逆に「マガール>ネワール」とするバフンは27人(36.5%)、両者を同格とするものが16人(21.6%)もいた。従って、ネワールとマガールの上下関係は、同格か、あるいは判定不能に近いのであろう。
- ④「ネワール>グルン」とするバフンは75人(94.9%)と明確だが、「グルン>ネワール」と逆に見る者も4人(5.1%)いる。しかし、両者を同格と見るバフンは零である。従って、殆どのバフンは、「ネワール>グルン」と見なしている。
- ⑤以上から、マトワリ内部のコースト序列に関して、バフンは、「マガール、ネワール>グルン」であるするが、マガールとネワール間の階差は判定不能というべきであろう。

<バフンによるナチュネ内部のコースト序列認識>

- ⑥バフンによる「ナチュネ内部」のコースト序列に関しては、「カミ>ダマイ」とするバフンは72人(87.8%)であるが、逆に「ダマイ>カミ」とするバフンも10人(12.2%)いるが、同格とするものは零である。
- ⑦ナチュネ内で「ダマイ>ミヤ」とするバフンは71人(88.8%)であり、逆に「ミヤ>ダマイ」とするものは9人(11.3%)、両者を同格とするバフンは零であった。従って「ダマイ>ミヤ」とする見方がバフンの大勢であると言える。
- ⑧またナチュネ内部で「カミ>ミヤ」とするバフンは69人(85.2%)で、逆に「ミヤ>カミ」とするものは11人(13.6%)、両者同格とするバフンがたった1人(1.2%)いた。従って、バフンの大勢は、「カミ>ミヤ」という見方であると言ってもよからう。
- ⑨以上から、バフンによるナチュネ内部の序列認識は、「カミ>ダマイ>ミ

ヤ」が大勢の見方であると言えるであろう。

8-2. ポカラ在住チェトリのカースト序列認識

表3 チェトリのカースト序列認識

	バファン	チェトリ	マガール	グルン	ネワール	ダマイ	ミヤ	カミ
①バファン	-	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)						
⑧チェトリ	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	-	82(98.8) 1(1.2) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	82(98.8) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)
⑨マガール	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 1(1.2) 83(98.8)	-	63(75.9) 4(4.8) 83(98.8)	17(20.5) 7(8.4) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)
⑩グルン	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	16(19.3) 4(4.8) 83(98.8)	-	5(6.3) 1(1.3) 79(94.0)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)
⑪ネワール	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	59(71.1) 7(8.4) 83(98.8)	73(92.4) 1(1.3) 79(94.0)	-	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)	83(100.0) 0(0.0) 83(98.8)
⑫ダマイ	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	1(1.2) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	-	50(61.7) 0(0.0) 81(96.4)	1(1.2) 0(0.0) 83(98.8)
⑬ミヤ	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	31(38.3) 0(0.0) 81(96.4)	-	25(30.9) 0(0.0) 81(96.4)
⑭カミ	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	0(0.0) 0(0.0) 83(98.8)	82(98.8) 0(0.0) 83(98.8)	56(69.1) 0(0.0) 81(96.4)	-

※上段=上位回数(率)、中段=等位回答数(率)、下段=有効回答数(率)

※回答者=83人

<チェトリによるバルナ序列の認識>

- ①「バファン>チェトリ>マトワリ>ナチュネ」というバルナ序列をチェトリも厳正に認めている(83人:100.0%)。但し、チェトリとマガールが同格とするチェトリがただ一人(1.2%)いたが、これは誤回答と見なしてもよからう。

<チェトリによるマトワリ内部のカースト序列>

- ②「マガール>グルン」とするチェトリは63人(75.9%)であったが、逆に、

「グルン>マガール」とするものは、16人（19.3%）、両者が同格とするものは、4人（4.8%）いた。従って、チェトリの大半は、「マガール>グルン」でマガールの方がグルンより上位であると見なしている。

- ③ 「ネワール>マガール」とするチェトリは59人（71.1%）で、逆に「マガール>ネワール」とするチェトリは17人（20.5%）、両者が同格とするものが7人（8.4%）もいた。従って、チェトリの多くの者は、同じマトワリでも「ネワール>マガール」と見なしていると言えるであろう。
- ④ 「ネワール>グルン」とするチェトリは73人（92.4%）と大勢だが、「グルン>ネワール」と見る者も5人（6.3%）、さらに、両者を同格と見るチェトリも1人（1.3%）いた。従って、殆どのチェトリは、「ネワール>グルン」と見なしていると言ってもよからう。
- ⑤ 以上をまとめると、マトワリ内部のカースト序列に関して、「ネワール>マガール>グルン」と見なしているチェトリが過半数以上である。

<チェトリによるナチュネ内部のカースト序列>

- ⑥ 「カミ>ダマイ」とするチェトリは82人（98.8%）で圧倒的であるが、逆に「ダマイ>カミ」とするチェトリも1人（1.2%）おり、両者が同格とするものは零である。
- ⑦ 「ダマイ>ミヤ」とするチェトリは50人（61.7%）であり、逆に「ミヤ>ダマイ」とするものは31人（38.3%）、両者同格とするチェトリは零であった。従って「ダマイ>ミヤ」とする見方がチェトリの大勢であると言える。
- ⑧ 「カミ>ミヤ」とするチェトリは56人（69.1%）で、逆に「ミヤ>カミ」とするチェトリは25人（30.9%）、両者同格とするものは零であった。従って、チェトリの大勢は、「カミ>ミヤ」という見方であると言えよう。
- ⑩ 以上をまとめると、チェトリによるナチュネ内部の序列認識は、「カミ>ダマイ>ミヤ」であるとするものが大勢であると言えるだろう。

8-3. ポカラ在住グルンのカースト序列認識

表4 グルンのカースト序列認識

	バファン	チェトリ	マガール	グルン	ネワール	ダマイ	ミヤ	カミ
①バファン	-	79(98.8) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	79(100.0) 0(0.0) 79(98.8)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)
②チェトリ	1(1.3) 0(0.0) 80(100.0)	-	71(88.8) 9(11.3) 80(100.0)	69(87.3) 10(12.7) 79(98.8)	70(87.5) 9(11.3) 80(100.0)	79(98.8) 0(0.0) 80(100.0)	79(100.0) 0(0.0) 79(98.8)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)
③マガール	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 9(11.3) 80(100.0)	-	0(0.0) 46(61.3) 75(93.8)	4(7.5) 33(62.3) 53(66.3)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	79(98.8) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)
④グルン	0(0.0) 0(0.0) 79(98.8)	0(0.0) 10(12.7) 79(98.8)	29(38.7) 46(61.3) 75(93.8)	-	18(25.4) 53(74.6) 71(88.8)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)
⑤ネワール	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	1(1.3) 9(11.3) 80(100.0)	16(30.2) 33(62.3) 53(66.3)	0(0.0) 53(74.6) 71(88.8)	-	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)	80(100.0) 0(0.0) 80(100.0)
⑥ダマイ	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	1(1.3) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	-	21(29.2) 6(8.3) 72(90.0)	2(2.6) 3(3.8) 78(97.5)
⑦ミヤ	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 79(98.8)	1(1.3) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	45(62.5) 6(8.3) 72(90.0)	-	39(54.9) 5(7.0) 71(88.8)
⑧カミ	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 80(100.0)	73(93.6) 3(3.8) 78(97.5)	27(38.0) 5(7.0) 71(88.8)	-

※上段=上位回答数(率)、中段=等位回答数(率)、下段=有効回答数(率)

※回答者=80人

<グルンによるバルナ序列の認識>

- ①「バファン>チェトリ>マトワリ>ナチュネ」というバルナ序列をグルンも大半が認めるのは、ほぼ80人(100.0%)に近い。但し、チェトリがマトワリ(マガール、グルン、ネパール)より上位にあるという見方のグルンは80%少々であり、チェトリがそれらのマトワリと同格であるというグルンの見方が、10%以上もあることは見逃してはなるまい。これを誤回答と見なすことは出来ない。

<グルンによるマトワリ内部のカースト序列>

- ②「マガール>グルン」とするグルンは零で、逆に「グルン>マガール」と

するグルンは29人(38.7%)いたが、両者同格とするグルンは最多で46人(61.3%)もいた。従って、グルンの過半数が、「マガール≡(同格)グルン」と見ていると言えるだろう。

- ③「ネワール>マガール」とするグルンは16人(30.2%)で、逆に「マガール>ネワール」とするグルンは4人(7.5%)、両者が同格とするものが33人(62.3%)もいた。従って、グルンの過半数は、マトワリ同士で「マガール≡ネワール」と見なしており、若干名のグルンが「ネワール>マガール」と見なしているに過ぎない。
- ④「ネワール>グルン」とするグルンは零であり、「グルン>ネワール」と見るグルンは、18人(25.4%)もいた。両者を同格と見るグルンが53人(74.6%)もいたことが注目される。従って、グルンの大勢は、「グルン≡ネワール」と見なしているが、自分達がネワールより上位であるとするグルンが25%近くもある点は無視できない。
- ⑤以上から、マトワリ内部のカースト序列に関して、グルンの見方は、「グルン≡マガール≡ネワール」という対等性・同格の見方が過半数以上である。そこには少なくともグルンは、自分たちが同じマトワリのマガールやネワールより劣位にあるとは思えないというグルンの主体性が、バワンやチェトリのマトワリ内序列認識と比べると、より強く印象付けられるように思われる。

<グルンによるナチュネ内部のカースト序列>

- ⑥「カミ>ダマイ」とするグルンは73人(93.6%)で圧倒的あるが、逆に「ダマイ>カミ」とするグルンも2人(2.6%)おり、両者が同格とするグルンは3人(3.8%)であった。
- ⑦「ダマイ>ミヤ」とするグルンは21人(29.2%)で、逆に「ミヤ>ダマイ」とするグルンは45人(62.5%)、両者同格とするグルン6人(8.3%)であった。従ってグルンでは「ミヤ>ダマイ」とする見方が、過半数を占めている。

- ⑧「カミ>ミヤ」とするグルンは27人(38.0%)で、逆に「ミヤ>カミ」とするグルンが39人(54.9%)、両者同格とするものは5人(7.0%)であった。従って、グルンでは、「ミヤ>カミ」という見方が過半数を占めている。
- ⑨以上から、グルンによるナチェネ内部の序列認識は、過半数が「ミヤ>カミ>ダマイ」だと考えていると言えるだろう。

8-4. ポカラ在住ネワールのカースト序列認識

表5 ネワールのカースト序列認識

	バファン	チェトリ	マガール	グルン	ネワール	ダマイ	ミヤ	カミ
①バファン	-	51(94.4) 3(5.6) 54(98.2)	53(96.4) 2(3.6) 55(100.0)	52(94.5) 3(5.5) 55(100.0)	46(83.6) 3(5.5) 53(96.4)	55(100.0) 0(0.0) 55(100.0)	53(96.4) 2(3.6) 55(100.0)	53(98.1) 1(1.9) 54(98.2)
②チェトリ	0(0.0) 3(5.6) 54(98.2)	-	49(94.2) 3(5.8) 52(94.5)	46(86.8) 4(7.5) 53(96.4)	34(64.2) 5(9.4) 53(96.4)	52(96.3) 2(3.7) 54(98.2)	52(96.3) 2(3.7) 54(98.2)	52(96.3) 2(3.7) 54(98.2)
③マガール	0(0.0) 2(3.6) 55(100.0)	0(0.0) 3(5.8) 52(94.5)	-	1(1.9) 7(13.0) 54(98.2)	0(0.0) 2(3.7) 54(98.2)	52(98.1) 0(0.0) 53(96.4)	49(94.2) 3(5.8) 52(94.5)	50(92.6) 3(5.6) 54(98.2)
④グルン	0(0.0) 3(5.5) 55(100.0)	3(5.7) 4(7.5) 53(96.4)	46(85.2) 7(13.0) 54(98.2)	-	1(1.9) 2(3.8) 53(96.4)	51(94.4) 2(3.7) 54(98.2)	52(96.3) 2(3.7) 54(98.2)	51(94.4) 2(3.7) 54(98.2)
⑤ネワール	4(7.5) 3(5.5) 53(96.4)	14(26.4) 5(9.4) 53(96.4)	52(96.3) 2(3.7) 54(98.2)	50(94.3) 2(3.8) 53(96.4)	-	53(98.1) 1(1.9) 54(98.2)	53(98.1) 1(1.9) 53(98.1)	52(96.3) 2(3.7) 54(98.2)
⑥ダマイ	0(0.0) 0(0.0) 55(100.0)	0(0.0) 2(3.7) 54(98.2)	1(1.9) 0(0.0) 53(96.4)	1(1.9) 2(3.7) 54(98.2)	0(0.0) 1(1.9) 54(98.2)	-	33(64.7) 4(7.8) 51(92.7)	5(9.6) 7(13.5) 52(94.5)
⑦ミヤ	0(0.0) 2(3.6) 55(100.0)	0(0.0) 2(3.7) 54(98.2)	0(0.0) 3(5.8) 52(94.5)	0(0.0) 2(3.7) 54(98.2)	0(0.0) 1(1.9) 53(98.1)	14(27.5) 4(7.8) 51(92.7)	-	7(13.5) 8(15.4) 52(94.5)
⑧カミ	0(0.0) 1(1.9) 54(98.2)	0(0.0) 2(3.7) 54(98.2)	1(1.9) 3(5.6) 54(98.2)	1(1.9) 2(3.7) 54(98.2)	0(0.0) 2(3.7) 54(98.2)	40(76.9) 7(13.5) 52(94.5)	37(71.2) 8(15.4) 52(94.5)	-

※上段=上位回答数(率)、中段=等位回答数(率)、下段=有効回答数(率)

※回答者=55人

<ネパールによるバルナ序列の認識>

- ①「バワン>チェトリ>マトワリ>ナチュネ」というバルナ序列をネパールも大半で認めているが、その断定性は、グルンの場合よりも弱いように思われる。例えば、バワンがチェトリより上位にあるとの認定率は、51人(94.4%)で、バワンとチェトリが同格にあるとネパールは3人(5.6%)もいる。これはこれまでにはなかった新現象である。またチェトリがマトワリ(マガル、グルン、ネパール)よりも上位にあるということのネパールの認定率もそれぞれ49(94.2%)、46人(86.8%)、34人(64.2%)と、満点値(55人100.0%)からはやや低い。これも、いままでなかった新現象である。また同様の傾向が、マトワリとナチュネの序列性に関するネパールの認知に関しても、見られる。つまり、52人(98.1%)から50人(92.6%)と100.0%には至らない。この新事実は、ナチュネによるバルナ序列の認識が、バワンやチェトリやグルンによるバルナ認識と殆ど同じである(認知率ほぼ100%)点を考慮に入れると、特別の理由が何かあるように思われる。バルナ序列の認知率がバワン、チェトリ、グルンのものと、ネパールのものとの間に10%近くの階差があることは見逃してはなるまい。

<ネパールによるマトワリ内部のカースト序列>

- ②「マガル>グルン」とするネパールは1人(1.9%)で、逆に「グルン>マガル」とするネパールは46人(85.2%)いたが、両者同格とするグルンは7人(13.0%)にすぎなかった。従って、ネパールの多数が、「グルン>マガル」と見ていると言えよう。
- ③「ネパール>マガル」とするネパールは52人(96.3%)で、逆に「マガル>ネパール」とするネパールは皆無であった。両者同格とするネパールが2人(3.7%)いた。従って、ネパールの絶対的多数は、「ネパール>マガル」と見なしている。
- ④「ネパール>グルン」とするネパールは50人(94.3%)であり、「グルン

>ネワール」と見るグルンも1人(1.9%)いた。両者を同格と見るネワールは2人(3.8%)であった。

- ⑤ 以上から、マトワリ内部のカースト序列に関して、ネワールの見方は、「ネワール>グルン>マガール」という階梯がはっきり見えている。ネワールは、マトワリでは最高位であるという主体性がその絶対多数であることに表明されている。

<ネワールによるナチュネ内部のカースト序列>

- ⑥ 「カミ>ダマイ」とするネワールは40人(76.9%)であるが、逆に「ダマイ>カミ」とするネワールも5人(9.6%)おり、両者が同格とするネワールは7人(13.5%)であった。
- ⑦ 「ダマイ>ミヤ」とするネワールは33人(64.7%)で、逆に「ミヤ>ダマイ」とするネワールは14人(27.5%)、両者同格とするもの4人(7.8%)であった。従って、「ダマイ>ミヤ」とする見方が、ネワールの過半数を占めている。
- ⑧ 「カミ>ミヤ」とするネワールは37人(71.2%)で、逆に「ミヤ>カミ」とするものは7人(13.5%)、両者同格とするものは8人(15.4%)であった。従って、ネワールは、「カミ>ミヤ」という見方が過半数を占めている。
- ⑨ 以上から、ネワールによるナチュネ内部の序列認識は、過半数が「カミ>ダマイ>ミヤ」とであると言えるだろう。

8-5. ポカラ在住ナチュネのコースト序列認識

表6 ナチュネのコースト序列認識の調査結果

	バフン	チェトリ	マガール	グルン	ネワール	ダマイ	ミヤ	カミ
①バフン	-	64(98.5) 0(0.0) 65(95.6)	65(95.6) (0.0) 68(100.0)	65(98.5) 0(0.0) 66(97.1)	66(98.5) 0(0.0) 67(98.5)	66(98.5) 0(0.0) 67(98.5)	65(97.0) 2(3.0) 67(98.5)	67(98.5) 0(0.0) 68(100.0)
③チェトリ	1(1.5) 0(0.0) 65(95.6)	-	66(98.5) (0.0) 67(98.5)	65(95.6) 1(1.5) 68(100.0)	66(98.5) 0(0.0) 67(98.5)	68(100.0) 0(0.0) 68(100.0)	65(95.6) 1(1.5) 68(100.0)	68(100.0) 0(0.0) 68(100.0)
④マガール	3(4.4) 0(0.0) 68(100.0)	1(1.5) 0(0.0) 67(98.5)	-	0(0.0) 37(54.4) 68(100.0)	8(11.9) 39(58.2) 67(98.5)	67(98.5) 0(0.0) 68(100.0)	62(91.2) 0(0.0) 68(100.0)	66(97.1) 0(0.0) 68(100.0)
⑤グルン	1(1.5) 0(0.0) 66(97.1)	2(2.9) 0(1.5) 68(100.0)	31(45.6) 37(54.4) 68(100.0)	-	31(46.3) 20(29.9) 67(98.5)	68(100.0) 0(0.0) 68(100.0)	64(94.1) 0(0.0) 68(100.0)	68(100.0) 0(0.0) 68(100.0)
⑥ネワール	1(1.5) 0(0.0) 67(98.5)	1(1.5) 0(0.0) 67(98.5)	20(29.9) 39(58.2) 67(98.5)	16(23.9) 20(29.9) 67(98.5)	-	66(97.1) 0(0.0) 68(100.0)	64(94.1) (0.0) 68(100.0)	67(98.5) 0(0.0) 68(100.0)
⑥ダマイ	1(1.5) 0(0.0) 67(98.5)	0(0.0) 0(0.0) 68(100.0)	1(1.5) 0(0.0) 68(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 67(98.5)	2(2.9) 0(0.0) 68(100.0)	-	56(84.8) 1(1.5) 66(97.1)	1(1.5) 2(2.9) 68(100.0)
⑦ミヤ	0(0.0) 2(3.0) 67(98.5)	2(2.9) 1(1.5) 68(100.0)	6(8.8) 0(0.0) 68(100.0)	4(5.9) 0(0.0) 68(100.0)	4(5.9) (0.0) 68(100.0)	9(13.6) 1(1.5) 66(97.1)	-	5(7.5) 1(1.5) 67(98.5)
⑧カミ	1(1.5) 0(0.0) 68(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 68(100.0)	2(2.9) 0(0.0) 68(100.0)	0(0.0) 0(0.0) 68(100.0)	1(1.5) 0(0.0) 68(100.0)	65(95.6) 2(2.9) 68(100.0)	61(91.0) 1(1.5) 67(98.5)	-

※上段=上位回答数(率)、中段=等位回答数(率)、下段=有効回答数(率)

※回答者=68人

<ナチュネによるバルナ序列の認識>

- ①「バフン>チェトリ>マトワリ>ナチュネ」というバルナ序列をナチュネも絶対多数的に認めている。しかし、その認知率を細やかに見れば、ある種の「意図的な乱れ」が覗けるように思われる。まず、バフンが他のどのコーストよりも上位であるというナチュネの認識率は、いずれも98.5%に近いが、100.0%ではない。それは、チェトリの方がバフンよりも上位であるというナチュネ回答が1名(1.5%)あったし、バフンとナチュネのミヤが同格であるというナチュネの回答が2人(3.0%)もあった。また、チェトリとグルンが同格、ならびにチェトリとミヤが同格であるするナチュネ

回答がそれぞれ1人(1.5%)づつあった。これらの「乱れ」は、筆者の推測では、不注意な間違いというよりも、意図的な慣行に対する反抗のようなものが、とりわけ「ミヤ」が絡むところに読み取れるのである。

<ナチュネによるマトワリ内部のカースト序列>

- ②「マガール>グルン」とするナチュネは皆無で、逆に「グルン>マガール」とするナチュネは31人(45.6%)もいたが、両者同格とするナチュネは37人(54.4%)で過半数のナチュネの見解であった。ナチュネは、「グルン≒マガール」と見ているらしい。
- ③「ネワール>マガール」とするナチュネは20人(29.9%)で、逆に「マガール>ネワール」とするナチュネは8人(11.9%)であった。両者同格とするナチュネは39人(58.2%)で過半数であった。従ってナチュネの過半数は、「ネワール≒マガール」と見なしている。
- ④「ネワール>グルン」とするナチュネは16人(23.9%)であり、「グルン>ネワール」と見るナチュネも31人(46.3%)もいた。両者を同格と見るネワールは20人(29.9%)であった。従って、ネワールとグルンの間のカースト序列に関するナチュネの認識は、ほぼ三等分されており、集団的には判定不能と見なさざるをえない。
- ⑤以上から、マトワリ内部のカースト序列に関するナチュネの見方は、「ネワール≒グルン≒マガール」という同格性が過半数を占めている。とりわけ、ネワールとグルンの間の階差認知は集団的には判定不能と言えるものであった。

<ナチュネによるナチュネ内部のカースト序列>

- ⑥「カミ>ダマイ」とするナチュネは65人(95.6%)と絶対的で、逆に「ダマイ>カミ」とするナチュネは1人(1.5%)、また両者同格とするナチュネは2人(2.9%)だけだった。
- ⑦「ダマイ>ミヤ」とするナチュネは56人(84.8%)と多数を占め、逆に

「ミヤ>ダマイ」とするナチュネは9人(13.6%)、両者同格とするもの1人(1.5%)しかなかった。

- ⑧「カミ>ミヤ」とするナチュネは61人(91.0%)で圧倒し、逆に「ミヤ>カミ」とするものは、5人(7.5%)、両者同格とするものは1人(1.5%)であった。従って、ナチュネの絶対多数が「カミ>ミヤ」という認識を持っていると言えるだろう。
- ⑨以上から、ナチュネによるナチュネ内部の序列認識は、「カミ>ダマイ>ミヤ」という序列がかなり絶対的であると言えるだろう。

8.6. 外国人である「ジャパニ(日本人)」のカースト上の位置づけ

表7 カースト序列での「ジャパニ(日本人)」に対する認識

認識主体	ジャパニとの比較カースト・エートス							
	バフン	チェトリ	マガール	グルン	ネワール	ダマイ	ミヤ	カミ
バフン	82(100.0)	80(98.8)	50(69.4)	44(62.9)	58(87.9)	7(8.8)	3(3.7)	4(4.9)
	0(0.0)	0(0.0)	21(29.2)	22(31.4)	5(7.6)	1(1.3)	1(1.2)	1(1.2)
	0(0.0)	1(1.2)	1(1.4)	4(5.7)	3(4.5)	72(90.0)	77(95.1)	76(93.8)
	82(100.0)	81(98.8)	72(87.8)	70(85.4)	66(80.5)	80(97.6)	81(98.8)	81(98.8)
チェトリ	81(97.6)	81(97.6)	53(68.8)	48(63.2)	66(86.8)	5(6.4)	4(5.2)	5(6.5)
	0(0.0)	0(0.0)	15(19.5)	25(32.9)	6(7.9)	0(0.0)	0(0.0)	0(0.0)
	2(2.4)	2(2.4)	9(11.7)	3(3.9)	4(5.3)	73(93.6)	73(94.8)	72(93.5)
	83(98.8)	83(98.8)	77(91.7)	76(90.5)	76(90.5)	78(92.9)	77(91.7)	77(91.7)
グルン	5(62.5)	3(42.9)	1(11.1)	7(20.6)	1(12.5)	2(18.2)	2(18.2)	2(20.0)
	1(12.5)	2(28.6)	6(66.7)	26(76.5)	5(62.5)	0(0.0)	1(9.1)	0(0.0)
	2(25.0)	2(28.6)	2(22.2)	1(2.9)	2(25.0)	9(81.8)	8(72.7)	8(80.0)
	8(10.0)	7(8.8)	9(11.3)	34(42.5)	8(10.0)	11(13.8)	11(13.8)	10(12.5)
ネワール	48(90.6)	45(86.5)	34(69.4)	36(72.0)	45(88.2)	11(22.4)	11(22.4)	13(26.0)
	1(1.9)	4(7.7)	6(12.2)	9(18.0)	5(9.8)	3(6.1)	3(6.1)	1(2.0)
	4(7.5)	3(5.8)	9(18.4)	5(10.0)	1(2.0)	35(71.4)	35(71.4)	36(72.0)
	53(96.4)	52(94.5)	49(89.1)	50(90.9)	51(92.7)	49(89.1)	49(89.1)	50(90.9)
ナチュネ	61(92.4)	62(92.5)	5(7.7)	10(15.2)	7(10.6)	3(4.5)	3(4.4)	4(5.9)
	0(0.0)	2(3.0)	53(81.5)	52(78.8)	50(75.8)	2(3.0)	2(2.9)	2(2.9)
	5(7.6)	3(4.5)	7(10.8)	4(6.1)	9(13.6)	62(92.5)	63(92.6)	62(91.2)
	66(97.1)	67(98.5)	65(95.6)	66(97.1)	66(97.1)	67(98.5)	68(100.0)	68(100.0)

最上段=比較カースト・エートスを上位と認識している回答数(率)

上二段=比較カースト・エートスと等位であると認識している回答数(率)

上三段=ジャパニ(日本人)を上位と認識している有効回答数(率)

上四段=回答数(率)

「ジャパニ(日本人)」とは、観光地ポカラに頻繁に訪れる日本人のことで、

ネパール在住のヒンドゥー教徒ではない。従って、ネパール人のカースト制度にはまったく関わりがないはずであるが、ネパール人のカースト・エートスでは、日本人もその階梯構造の中に入れてしまうことがある。本調査によるバフンの見解では、ジャパニがバフィンより上位であるという回答はまったく零であるが、チェトリ、マガール、グルン、ネワールよりも上位にあるという回答数は、それぞれ1人(1.2%)、1人(1.2%)、4人(5.7%)、3人(4.5%)となる。筆者は、以前1人(1.2%)の回答を「誤差の範囲内」という評価をしたことがある(3-1-6)。しかし、今回の1人(1.2%)は他の8人も同様の結果を出している事実から単に「誤差の範囲内」と見逃すわけにはいかない。ここで興味深いのは、「(上下階差がなく)同位(同列)である」と回答するものが、ジャパニのバフィン、チェトリとの比較には皆無であったのが、ジャパニとマガールとの間には21人(29.2%)、またグルンとの間には22人(31.4%)、ネワールとの間には5人(7.6%)が出たのである。一般的に、バフィンやチェトリは、人種的には「地中海系人種」であるとされるが、マガール、グルンは、ジャパニと同様に「モンゴロイド系人種」であり、それらの間は、容貌・体型など形質的にもジャパニと非常によく似ていることが認識されている。したがって、彼らの間の類似感がカースト的な同列観に結合される考え方は理解できないものでもない。

8-7. 主要カースト群ごとのカースト序列認識まとめ

これまで見てきたアンケート調査による主要カースト群(バフィン、チェトリ、マトワリ、ナチュネ)それぞれのカースト序列認識を一覧表にまとめると「表8」のようになる。

表8 主要カースト群ごとのカースト序列認識一覧

	バルナ序列	マトワリ内序列	ナチュネ内序列
バフン	バフン>チェトリ >マトワリ>ナチュネ	マガール、ネワール >グルン	カミ>ダマイ>ミヤ
チェトリ	バフン>チェトリ >マトワリ>ナチュネ	ネワール>マガール >グルン	カミ>ダマイ>ミヤ
グルン	バフン>チェトリ >マトワリ>ナチュネ	グルン≒マガール ≒ネワール	ミヤ>カミ>ダマイ
ネワール	バフン>チェトリ >マトワリ>ナチュネ	ネワール>グルン >マガール	カミ>ダマイ>ミヤ
ナチュネ	バフン>チェトリ >マトワリ>ナチュネ	ネワール≒グルン ≒マガール	カミ>ダマイ>ミヤ

表8から、極めて明快なのは、バルナ序列の認識に関しては、バフン、チェトリ、グルン、ネワール、ナチュネのいずれのカーストにおいても同様の序列を示している。これは、1854年にムルキ・アインが発布されて以来、そこに規定されたバルナ序列がその後の曲折を経て、現在のネパールの人々にとって規範化した序列として受け入れられていることを物語っていると言えるだろう。

しかしながら、その序列構造の中で、「マトワリ」群に含まれる諸カースト群の序列に関しては、各カーストにおいてかなりの変異が見られる。つまり、バフン達はマガールとネワールがほぼ同格であると見なし、それら両者は、グルンよりもより上位にあると見なしているが、チェトリ達はネワールがマガールよりも上位にあるとし、グルンはマガールよりも下位にあると見なしている。しかし、グルンは、マトワリ内において、グルンもマガールもネワールも同格である見なしているが、ネワール達自らのカーストがグルンよりも上位にあり、そのグルンよりもマガールが下位にあると見なしている。それに対し、ナチュネ達は、グルン達と同様に、マトワリ内部ではグルンもマガールもネワールも同格であると見なしている。ここで、マトワリ内序列において、三者同格とする見方がグルン達とナチュネ達の間で一致して

いることが注目されよう。

バルナ序列最下層ナチュネの内部カースト序列に関しても若干の変異が見られる。ただしずれのカースト群もカミがダマイよりも上位になる点においては一致しているが、ミヤの位置づけのみが異なっている。バワン達、チェトリ達、ネワール達、ナチュネ達は、一致してカミ>ダマイ>ミヤの序列、つまりミヤを最下層としているが、グルン達だけは、ミヤ>カミ>ダマイ>という異なった序列、つまりミヤを最上層だと主張している。何故、グルン達だけがミヤをナチュネ内最上位に見なしているのか、ということの理由は、現在の筆者には明快ではない。恐らく、ポカラ市内でのカースト別居住地域分布において、グルンとミヤの居住地区が近接し、両者の間に日常的により頻繁な接触が行われていることが、その理由ではなかろうかと推察している。

以上、マトワリ内部のカースト序列それにナチュネ内部のカースト序列に関してもグルン達だけがある種の特異な認識をしている点が明らかである。これは、ポカラのカースト別居住歴に関して、グルン達のポカラ居住歴が一番新しいことと関連していることが予想される。バワン、チェトリ、ネワール、ナチュネは古くからポカラに共存していたが、グルンがポカラに住み始めるのは、少なくとも1960年代に入ってポカラでマラリアが駆逐された以降であり、グルカ兵に出稼ぎに行ったグルン達が帰国して、親が住んでいる山地には戻らずにポカラに土地を入手して住み始める1970年代以降の新しい現象であった。そして、グルン達は一部の金持ち以外は、地価の高いポカラ市街地は敬遠して、ポカラ南方の近郊地域に住みだし、その地域の近くにミヤが住んでいたことが、ポカラのグルンがミヤをナチュネ内での最上位と見なす理由となったのではなかろうかと思われる。

9. 結論

著者はかつて、ネパールのポカラにおける「エスニシティと階級」（山本1985）を論じたことがある。そこで、ポカラにおける民族集団が「利益集団」化する前提として、(1) その集団が「適正規模」の大きさと、(2) その集団に優れたリーダーが存在することの二条件を明確にしたことがある（山本1985:83-85）。この様な二条件が満たされない時には、たとえその集団の全員が相対的剥奪感を抱いていようとも、その集団に残るよりも他の集団に接近する方がより利益があると判断することがありうるのである。ひどい場合には特定の民族集団が分裂することも起こりうる。だから、同化、対抗、分裂その他いろいろの選択が、いずれの民族集団の人々にとっても生きるための「戦略的」あるいは「適応」的決定に委ねられているのである。

ネパールにおいては、ジャート運動は徐々に退潮するカースト・システムの中の「儀礼的階級」のみならず貨幣市場社会の進展がもたらした経済階層の両極化現象での経済的階級という「二重の階級問題」を切り離して語ることが出来ない。富裕化した人々は、自己の出自ジャートの貧困な親族を助けるべきリーダーシップを取るべきか、それとも自己とその家族の為になお一層社会的上昇する為に他のジャートの富裕者層と付き合うべきかの選択が絶えず試されわけである。インドの場合は、この二重の階級問題を解決する社会的装置として「異カースト結婚（上昇婚）」がある程度機能していると思われる。つまり、貧困な上級カーストの男性が富裕化した低いカーストの女性を娶る事である（それにより、貧乏な夫側は、妻側から少なからぬ婚資金を獲得することが可能になる）。しかし、私の調査では、その様な「婚資金を手土産にした上昇婚」はポカラのカースト通婚において一般的に見られない（Yamamoto 1983）。

以上の理論的考察に基づいて、我々は以下の論点を整理をしておきたい。まず第一に、中野（1993）から、我々は国家（支配集団）の少数民族集団へ

の対応が基本的に四つの選択があることを受け止めたい。もちろん、この四タイプは、同一の国家でもその歴史の流れの中であるタイプから別のタイプへと変化することがありうる。この四タイプは、国家のナショナリズムの質と強さにより規定されてくるので、それらを総称して「国家的環境要因」と呼んでも構わないであろう。

第二に、山本（1985）から、個々の民族集団は人口の大きさや、リーダーシップの強さが異なり、従って、その集団の内的結合性に相違が見られる。従って、リーダーシップと適正規模性などを、「社会的存在要因」として規定しておきたい。そして第三に、萩野（1996）ならびに梶田（1988）から、特定の少数民族集団が国家、あるいはその支配民族集団に対して取りうる選択として六つのモデルがありうるとする。それらは、①擬似民族化、②象徴的民族化、③（完全）同化、④二重構造化、⑤対抗化、⑥無関心化である。言うまでもなく、この六つのモデルの選択は個々の民族集団が決定するもので、彼らは、特定の国家的環境要因の下で、自己の集団の「社会的存在要因」を吟味しながら、六通りの選択をするものと考えられる。言うまでもなく、ある特定の集団の結束力が弱くて、全体の足並みが揃わず、あるいは分裂して、同一の集団であるのに二つ以上の異なるモデルを同時に選択することもある。また、特定の集団が、時系列的に条件・環境の変化でモデルの選択を変える事も大いにありうる訳である。

以上のような民族集団の対応を比較分析する理論的枠組みが、東アジアと東南アジアにおいて有効であることは、中野や萩野の研究からも予感できる。しかしながら、東アジア・東南アジアとは歴史的・文明的土壌が非常に異なる南アジアにおいて、この理論的枠組みが有効であるかどうかは、まだ我々は確信を持ってない。南アジアにおいて、インドは植民地化を体験した点では東南アジア諸国と歴史的に類似性を持つが、国家の枠組みを離れたカースト制度という何千年もの歴史をもつ社会的枠組みを保有しており、この点が東アジアや東南アジア諸国とは全く異なるからである。とりわけ本稿で扱

うネパール共和国（旧ネパール王国）は、一度も植民地化されたことがなかったし、国家の枠組みがカースト制度の枠組みと重なり合う特徴を持ったという点で、東アジア・東南アジアの国家形成とはかなり異質なものであるからである。それだけに、上で明らかにした我々の比較研究の図式がネパールに有効かどうかの検証をすることは極めて重要であろう。ただ残念ながら紙面の制限から、本稿ではネパールの国家形成の歴史段階しか取り扱うことが出来ない。

注

- 1) 「ヴァルナ」は土着化したヒンドゥー教が人々に浸透する過程で、その主神の一つである「ブラフマー」（宇宙の創造神）の「口」からブラーマンが、その「腕」からクシャトリヤが、その「腿」からヴァイシャが、そして、その「脚」からシュードラが生まれたという起源伝説が広まっている。
- 2) このマッラ王朝の最盛期、ジャヤ・スッティッティ王の治世（1380-94）において、初めてカースト制度が導入された。このカースト制度は、64階級（36階級説もあり）からなる精密な階級組織から出来ていたと言われているが、インドのような厳格なものではなく、職能規定的な色彩が濃いものであったとも言われている。我々は、このマッラ王朝が導入したカースト制度を「ネワール系カースト制度」と呼び、更に、その後マッラ王朝を征服したグルカ王朝が制定したカースト制度を「グルカ系カースト制度」と呼び分けることによって、両者を区別しておきたい。
- 3) このグルカ戦争終了後成立した「セゴール条約」では、ネパールは領土の一部をイギリスに割譲させられた上に、外国使節を拒否してきたネパールがイギリスの高等弁務官をカトマンズに駐在させられてしまったのであった。しかし、この講和条約以来、ネパールのグルカ兵の勇猛さに感心したイギリス政府は、グルカ兵を自らの傭兵として迎え入れる契約をネパール政府と交わしたのであった。その結果、有名なイギリス陸軍のグルカ連隊の伝統が始まったのである。
- 4) イギリスとネパールが君主制という共通点があったにも関わらず、近代日本の国家形成黎明期にドイツのワイマール憲法を手本として明治憲法を作成した伊藤博文の姿勢とはまるで違って、ネパールのJ.B. ラナは、英国憲法をモデルにせず、古代インドの「ヴァルナ・モデル」を導入したのである。その理由は、恐らく彼が英国人嫌いであったこと以外に、彼なりのヴェーダ優先主義があったのであろう。
- 5) インド・ヨーロッパ語族系のネパール人の殆どはヒンドゥー教徒であるが、彼らは「バルパテ・ヒンドゥー」と「タライ・ヒンドゥー」とに大別される。「バルパテ」とは「山の人」を意味する。ネパール領内のマハーバラータ山脈から大ヒマヤラ南麓の中央

盆地カトマンドゥ盆地やポカラ盆地等を含む)や比較的低い丘陵地帯(高くてもせいぜい3千米位まで)にかけての地域一体を「バハール」と呼ぶ。従って「バルバテ・ヒンドゥー」は、「バハール・ヒンドゥー」とも言われることがある。次にチベット・ビルマ語族系諸語を持つモンゴロイド系人種は、おもにヒマラヤ中央部の深い谷間から南斜面の比較的高い丘陵地帯に住んでいる「ヒマラヤ原住民」である。地域的には、ネパール東部にはリンブーやライが見られ、カトマンドゥ盆地周辺地域にはタマンが、そして西部にはグルン、マガール、タカリが居住している。また、これらの人々よりもより高度山岳地帯に住むチベット語方言部族として、チベット系のシェルパが知られている。これらのモンゴロイド系諸民族集団は、本来、シャーマニズム的な土着宗教と習合したチベット仏教に帰依していた。最後に、ネワールの人々は今でもその半数近くがカトマンドゥ盆地に居住している。しかしグルカ王朝に自らの王国群が順番に攻め落とされた結果、カトマンズ盆地を逃れてネパール各地に分散したネワールの人々は、今やネパール全体の半分にもなる。彼らの母語であるネワール語はチベット・ビルマ語族に属するようであるが、人種的にはまだ明瞭に特定されていない。現在のネワールの多くはヒンドゥー教徒であるが、特にパターンには仏教徒も少なくない(石井 1986:140)。

- 6) そのリストには、J.B. ラナの名前がトップに挙げられており、それに続いて30人のラナ家の人々そして王家を代表する4人のシャハ名が最初の部分に続いている。全メンバー219人中、チェトリが100人以上の最大多数を占め、ブラーマン(パファン)が30人、8人のネワール、3人のグルン、4人のマガール、4人のタマン、その他種々のジャート代表者から構成されている(Hofer 1971:42)。
- 7) 「聖紐(janai)」は、聖化された木綿糸の紐で、タガダリ(Tagadhari:"twice-born")カーストの象徴とされる。ポカラでは、一般にパファンは7本糸、チェトリは5本の糸からなる紐を用いる。このジャナイは一年に一度新しいものと交換する(「聖紐日(janai-purnima)」)。タガダリ・カーストの男の子供達は、12、3才になると、「初聖紐儀式」を迎える。この儀式により男の子は、その日以来生涯に渡って自分が師と仰ぐパンディットから、彼だけの秘密の「呪文(mantra)」を授かり、聖紐を掛けてもらうようになる。この儀式を経て初めて、彼は一人前のパファン、またはチェトリの男子として認められ、結婚する資格と共にその家族や父系集団(thar)の祖霊崇拜等の宗教的行事に参加する資格を与えられる。しかしながら、近頃は、脱サンスクリット化の動きで、これを行わないパファン・チェトリも出てきている。逆に、元来チベット仏教徒であるタカリーの金持ちにも、ネワールの一部にも聖紐を付けている者が少なくない。マトワリのサンスクリット化の現象と言ってよからう。
- 8) 「ラージプート(Rajput)」とは、13世紀頃ムスリムのインド大陸侵入の際、それと勇敢に戦ったとされる北インドのクシャトリア氏族である。ムルキ・アインでは明瞭に規定されていないが、私のポカラでの調査は、現王族であるシャハ氏族が「タクリ・

チェトリ (Thakuri Chetri) であるとされ、ラージプトの末裔であると言うものが多かったし、それに対して否定的見解をするものはいなかった。しかし、貴族階級であったラナ氏族やタパ氏族に関しては「タクリ・チェトリ」と見なす者もいるが、そうではなくただのチェトリであるという見解を持つ人々も多い。言うまでもなく、ムルキ・アイン発布者である J.B. ラナは、このラナ・チェトリの出身である。歴代のネパールの首相、大臣、将軍のポストは、このラナ、タパ氏族出身者が殆ど占有してきたと言っても過言ではない。

- 9) 「スワール (Sunuwar)」は、現在ポカラでは「スナル (Sunar)」と短縮されて呼ばれており、それは「ナチュネ (Nachune)」の一カーストに位置づけるパワンやチェトリも多い。しかし、ムルキ・アインでは、それが上位第二位のカースト群に入れていることに、私は驚いている。もしそれが事実であったならば、政治的特権層の常として貴金属の魅力に取り付かれたラナ家の人々は、金・銀等の貴金属を細工売買する彼らの特殊性に特別の配慮を試みたのではないかという可能性を否定できない。
- 10) 現在でもマガル族の一部には「タパ」とか「ラナ」とかチェトリ将軍達と同姓を名乗る人々が存在する。このことは、グルカ王朝遠征軍において軍功抜群であった彼らの祖先に与えられた報償の名残りを意味しよう。現在でもグルカ兵の精銳は、マガル族、グルン族、タマン族を始め、これらマトワリの精強な若者で主力が構成されている。(但しマトワリ出身兵士は下仕官止まりで、将軍等の高級将校は殆どチェトリ出身である。)
- 11) 現在ポカラにいる「クマール (壺作り)」は、アンタッチャブルであるとされている。
- 12) カトマンドゥに鎮座する「クマリ」はネワールの大衆の間では「生き神」として広く信仰されている。毎年、雨季明け行われるネワール人の宗教的祭礼である「インドラ・ジャトラ」の祭日には、ネパール国王がクマリの神殿を訪れ、その足元に額を付けて敬意を表する最高の表敬儀礼をする慣習がある。この慣習も、征服者の子孫が被征服者の子孫達の残存する感情的反目を慰撫する為の儀礼である様に思われる。しかしながら、ムルキ・アインの中では、第一位の儀礼的カースト群内で、チェトリの方がネワール諸カーストよりも上位に位置づけられていること、並びに、それらのネワール諸カースト群の相対的な上下関係は不明瞭にされていることを見落としてはなるまい。クマリの美しい写真解説は真野 (1992:109-113) を参照されたし。
- 13) ドウンガナ (Dhungana 1978) によれば、ムルキ・アイン発令の初期の時代にブラーマン婦人と性交渉をした下位カーストの男が死刑にされたり、サルキ女性と性交したマガールの男性やダマイ女性と性関係を持ったボテ男性が、罰としてペニスを切断された実例があったという。その「デモンストレーション効果」により異カースト間性交渉への畏怖観念を民衆の間に定着させることに力を発揮したであろうと考えられる。
- 14) ヒューラー・ハイメンドルフ (1978) の「チェトリ膨張策」の見解に刺激された山本

のカースト通婚の研究 (Yamamoto 1983) では、ポカラにおいてカースト通婚で出来た子供を何カーストに帰属させるかという問題に関して、原則的に「カースト内婚とカースト通婚の相違に関わらず、子供は父親と同一カーストに帰属される」という一般的なルールの存在と共に、二つの「例外則」が見られることを確認している。それら例外則は、①「ブラーマンの父親と非ブラーマン且つ非アンタッチャブル (具体的にはチェトリ、マトワリ、ネワール) の母親とに出来た子供は (ブラーマンでなくて、より一級下の) チェトリ・カーストに属する」と、②「非アンタッチャブルの父親とアンタッチャブルの母親との間に生まれた子供は、父親でなくて母親のカースト (つまりアンタッチャブル) に属する」のである。このカースト通婚による子供のカースト帰属に関する例外則は、正統的なカースト内婚規制を大胆に改変したものと言えるが、恐らくネパール独自のものであろう。とりわけ、その例外則①の存在は、チェトリ・カーストの人口増加に大きな貢献をもたらしたものと考えられる。ヒューラー・ハイメンドルフ (Fürer-Haimendorf 1978) によれば、グルカ朝カースト制度の導入には、その当時人口的に少数派であったチェトリ・カーストの人口的膨張の狙いがあったという。その可能性は大いに高いと私自身は考えているが、もしそうならば、これはネパールの政治的実権を自分達チェトリで握るための手段の政策であったと思われる。その当時の軍勢力は徴兵出来る兵士の数で殆ど決定されたからである。我々のポカラでのカースト通婚調査で明らかになったことだが、一夫多妻婚をすポカラの男達は、一般的に「第一妻」は「カースト内婚 (同カースト婚)」をする (または、周囲の圧力からさせられる) が、第二妻を求める際にはカースト通婚好む傾向が見られるからである。しかしながら、一夫多妻婚が実際に実行可能となるには、男がかなりの経済力を保有する場合に限定される。従って、現在とはともかく過去においては、農地を潤沢に持っていた上位カーストのバフンやチェトリの男にはその実施が可能であっても、そうではないマトワリの男達には困難なことであったろう。従って、バフンやチェトリの裕福な男達がマトワリやネワールの女達と複婚して生ませた子供達は、全てチェトリに帰属させられた筈である。更に、同様の例外則がグルカ王朝の領土拡大期にも機能していたと仮定するならば、バフンやチェトリの男子達が移動先の土地でマトワリやネワールの女性を娶った場合にも、出来た子供達は全てチェトリに帰属されたことになる。文化人類学では、上位階級の男性が下位階級の女性とする結婚を「上昇婚 (ハイバガミイ)」とし、下位階級の男と上位階級の女との結婚「下降婚 (ハイボガミイ)」として、両者を区別する。ヒンドゥー社会におけるカースト通婚の諸研究 (その殆どがインドでの事例) を参照すると、上昇婚は頻繁に起こっていても、下降婚は殆ど見られない。現在とはあれ過去においてネパールでも、タガダリ男子がマトワリ (ネワールも含め) 女子と上昇婚をした例は頻繁に起こったであろうが、マトワリ男性がタガダリ女性と下降婚をする例は、殆どなかったのではなかろうか。更に、この場合重要なことは、タガダリ男子とマトワリ女子との間の上昇婚には、そ

の土地のマトワリ有力者がラナ政権の有力者に政治的保護を求める見返りとして、その娘を差し出すという「政略結婚」も起こったであろう。

- 15) Shyamu Thapa (1995:181-192) にネパールの75「地方 (district)」の1991年次実施のセンサス調査結果に基づいて集計した結果、最大ジャートがチェトリでネパール全人口の約16.0%を占めている。タパは、「ヒル・バファン」と「タライ・バファン」とを別々に分けて集計しているので、今、両者を別にしたヒル・バファンを「狭義のバファン」、両者を合併したのを「広義のバファン」とすると、狭義のバファンの人口は12.9%となり、広義のバファンなら13.8%となる。ともあれ、狭義でも広義でも、バファンは第2位の最大民族集団で第3位のマガールの7.2%を大きく引き離している。ちなみに、ネワールは第5位で5.3%、ポカラで優勢なグルンは第12位で2.4%の少数民族にしかすぎない。
- 16) ラナ支配のネパールは、セゴール条約(1816年)以来、イギリス植民地政府にグルカ兵を差し出し、インドの反植民地主義運動を抑えてきた。とりわけ、1847年にセポイの反英独立反乱が起こると、J.B. ラナは自国のグルカ兵を率先してインドに派兵して、イギリス植民地政府のインド独立運動の動きを平定することに応援したのであった。それ故、この様なラナ家に支配されたネパールの隣国外交は、その後のインド独立戦争の闘志達のたいなる恨みと反感を買ったことは言うまでもない。
- 17) ①ヒンドゥー教が憲法にも保障された国家宗教であることにより、ネパールの伝統的なヒンドゥー政体が継承されてる。これは、宗教と政治とを分離する近代的な政治思想からの後進を意味していよう。②国語としてのネパール語は、それがバファン・チェトリの母語であり、他のジャートの母語でなかった事実、政府官僚・役人の登用にはバファン・チェトリが優先されるという条件を作り上げている。③バファン・チェトリが政府要職のみならず役人ポストを占有する王国(王族もタクリ・チェトリであると言われる)は、おのずから政治がバファン・チェトリに有利になりやすく、その反面、それら以外のジャートたちが政治的に疎外されやすい特徴を持つ。これらいずれの問題も、ヒンドゥー政体の思想から具体的に派生する現実問題なのである。
- 18) ハルカ・グルン (Gurung 1992:20) によれば、バファン・チェトリ出身の kongress 党国会議員候補の比率は79.9%となり、また同様にバファン・チェトリ出身の共産党国会議員候補の比率は84.2%となっている。

参考文献

(日本語文献)

- 飯島茂編 (1993) 『せめぎあう「民族」と国家—人類学的視野から—』アカデミア出版会。
石井 溥 (1980) 『ネワール村落の社会構造と其の変化—カースト社会の変容—』(アジア・アフリカ言語文化叢書14) 東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所。
内堀基光 (1989) 「民族論メモランダム」田辺繁治 (編) 『人類学的認識の冒険—イデオロ

- ギーとプラクティス—』同文館、27-43.
- 梶田孝道 (1988) 『エスニシティと社会変動』有信堂.
- 中井和夫 (1994) 「“新東欧”と独立国家共同体」山内昌之・蓮實重彦 (編) 『いま、なぜ民族か』(UP 選書 268) 東京大学出版会、153-167.
- 中野秀一郎 (1993) 「エスニシティの社会学に向けて」中野秀一郎・今津孝次郎編 『エスニシティの社会学—日本社会の民族的構成—』世界思想社、243-263.
- 長崎暢子 (1994) 「政教分離主義と基層文化・ヒンディーイズム」山内昌之・蓮實重彦編 『いま、なぜ民族か』(UP 選書 268) 東京大学出版会、81-97.
- 名和克郎 (1995) 『国家・カースト・民族—ネパール、タカリーをめぐる民族間関係の諸相—』(未出版修士論文) 東京大学大学院総合文化研究科.
- 関根康正 (1995) 『ケガレの人類学—南インド・ハリジャンの生活世界—』東京大学出版会.
- 前田成文 (1993) 「国家・言語・宗教・慣習—東南アジアからの視点—」中野秀次郎・今津孝次郎編 『エスニシティの社会学—日本社会の民族的構成—』世界思想社、223-242.
- 真野透映 (1992) 『クマリ (生き神) の住む国・ネパール』バクト社.
- 萩野昌弘 (1996) 「国境を知らざる人々—東南アジアにおける近代国家の形成と少数民族」杉谷滋 (編著) 『アジアの近代化と国家形成—経済発展とアジアのアイデンティティ—』(関西学院大学産研叢書 20) 御茶の水書房、71-92.
- 高島善哉 (1975) 『民族と階級—現代ナショナリズム批判の展開—』現代評論社.
- 友杉 孝 (1988) 「商品の系譜—インド、スリランカそして日本の事例からの試み—」青木保・黒田悦子編 『儀礼—文化と形式行動—』東京大学出版会、148-192.
- 山本勇次 (1985) 「階級とエスニシティ—ネパールのカーストは利益集団か?—」『文化人類学』1 (2)、74-92.
- (1986) 「マトワリ・チュトリ再考—反サンスクリット化か?—」P. R. Sharma・三瓶清朝・山本勇次 (共著) 『ネパールにおける言語・文化・社会の動態 (研究報告)』東京外国語大学アジア・アフリカ言語文化研究所、49-106.
- (1991) 「ボカラのカースト・ジョーク—階級序列の不確定性の視点から—」『活水論集』34:921.
- (1995) 「ネパールの観光都市ボカラにおける上級カーストの接待様式の変容: 脱サンスクリット化か?」『MONUMENTA SERINDICA』26:249-273.
- (1997a) 「中産階層の『競争エートス』の未成熟と貧困階層の拡大—ネパールの観光都市ボカラは、なぜ貧しくなるのか?—」江口信清 (編著) 『『貧困の文化』再考』有斐閣、9-53.
- (1997b) 「長崎県高島の炭鉱離職者の『貧困のエートス』と、その変容—日本とネパールの貧困化現象を比較することは可能か?—」江口信清 (編著) 『『貧困の文化』再考』有斐閣、271-321.

- 山本勇次・北村右一 (1989) 『ネパール都市カースト社会のコンピュータ定量解析による通カースト比較研究 (1): データ収集と電算機処理の方法論的検討 (文部省科学研究費補金中間報告書)』長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター。
- (1990) 『ネパール都市カースト社会のコンピュータ定量解析による通カースト比較研究 (2): カースト別職業構造 (文部省科学研究費補助金中間報告書)』長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター。
- (1992) 『ネパール都市カースト社会のコンピュータ定量解析による通カースト比較研究 (3): カースト別居住期間とカースト別土地所有の構造 (文部省科学研究費補助金中間報告書)』長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター。
- (1994) 『ネパール都市カースト社会のコンピュータ定量解析による通カースト比較研究 (3): カースト別居住期間とカースト別土地所有の構造 (文部省科学研究費補助金中間報告書)』長崎大学教育学部附属教育実践研究指導センター。
- 湯田 豊 (1997) 「カーストという現象—インドにおける階級社会—」工藤喜作その他 (編) 『国家とエスニシティ—西欧世界から非西欧世界へ—』勁草書房、58-99。

参考文献

(英語文献)

- Barth, Fredrick (1969) *Ethnic Groups and Boundaries: The Social Organization of Cultural Difference*, Bergen: Universitetsforlaget, London: G.Allen & Unwin.
- Bista, DorBahadur (1980) *People of Nepal*, RatnaPustakBhandar: Kathmandu.
- Caplan, Lionel (1970) *Land and Social Change in East Nepal*, University of California Press: Berkeley.
- Cox, Thomas (1989) Langtang Tibetans And Hindu Norms As Political Language: A Critical Perspective on Sanskritization Theory, *Contributions to Nepalese Studies*, Vol. 16, No. 1, p.1120.
- Dhungana, P. K. (1978) History of Punishments in Nepal, *Nepal Law Review*, Institute of Law, Tribhuvan University, Vol. 1, No. 4, pp.54-62.
- Dumont, Louis (transl. by M. Sainsbury) (1980) *Homo Hierarchicus: The Caste System and its Implications*, Chicago University Press: Chicago.
- Furer-Haimendorf, Christoph von (ed.) (1978) *Caste and Kin in Nepal, India and Ceylon: Anthropological Studies in Hindu-Buddhist Contact Zones*, Sterling Publishers Pvt. Ltd.: New Delhi, India.
- Gellner, David (1986) Language, Caste, Religion and Territory: Newar Identity Ancient and Modern, *European Journal of Sociology*, No.27, pp.102-148.
- Gurung, Harka (1992) *Representing and Ethnic Mosaic.*, Himal, May.
- Hofer, Andras (1979) *The Caste Hierarchy And The State in Nepal: A Study of The*

- MulukiAin of 1854*, Universsitatsverlag Wagner Innsbruck: Munchen.
- Leach, Edmund R. (1962) "Introduction: What Should We Mean By Caste?", E. R. Leach (ed.) *Aspects of Caste in South India, Ceylon and North-west Pakistan*, Cambridge University Press: London, pp.1-10.
- Malla, Kamal P. (1996) The Profane Names of the Sacred Hilllocks, *Contributions to Nepalese Studies*, Vol. 23, No. 1, p.19.
- O'Neill, Tom (1994) Peoples and Polity: Ethnography, Ethnicity and Identity in Nepal, *Contributions to Nepalese Studies*, Vol. 21, No. 1, p.143.
- Ragsdale, Tod A. (1990) "Gurungs, Goorkhalis, Gurkhas: Speculations on a Nepalese Ethno-History", *Contributions to Nepalese Studies*, Vol. 17, No. 1, p.124.
- Sharma, Prayag Raj (1977) "Caste Social Mobility and Sanskritization: a study of Nepal's Old Legal Code", *Kailash*, No. 10, pp.277-299.
- (1978) "Nepal: Hindu-Tribal Interface", *Contributions to Nepalese Studies*, Vol. 6, No. 1, p.114.
- Srinivas, M. N. (1966) *Social Change in Modern India*, University of California Press: Berkeley.
- Yamamoto, Yuji (1983) Inter-caste Marriages in Pokhara: Sanskritization or Urbanization?, 『アジア・アフリカ言語文化研究』 25: pp.1-38.